

はじめに

本稿では、プロイセン王国（以下「プロイセン」という。）が欧州の列強へと勃興する契機になったオーストリア継承戦争と七年戦争を概観する。その上で、これら戦争を指導したプロイセン国王フリードリヒ2世（以下「フリードリヒ」という）の戦い方が、実は、その後の「近代戦」の特性を先取りしていたことについて論じる。

通説では、オーストリア継承戦争や七年戦争は、「シュレジエン地方の領有をめぐる、プロイセンとオーストリアが争った戦い」と端的に表され、近代以前の戦いとされている。しかし、オーストリア継承戦争と七年戦争は西欧の主要国全てが参戦し、さらに植民地を巡ってアメリカ、アジアでも戦争が行われたため「世界戦争²」の様相を呈しており、一地方を巡る単純な戦争ではなかった。また七年戦争では、プロイセンが東西南北から同時に攻め込まれながらも勝利し、それ故、戦前の日本陸軍はフリードリヒの戦い方をよく研究していた³。さらに、これらフリードリヒの戦い方は軍事史上、画期的な戦い方、「近代戦」の萌芽ともいえるべきものがあった。しかし、両戦争の経緯の複雑性の故か、現在では、それらが十分知られているとは言えない。ましてやフリードリヒの戦い方が「近代戦」を先取りしていたことについて、その詳細な分析は未だ不十分であると考えられる。

そこで本稿では、第1章では論述を進める上で前提となる当時の国際情勢について概観するとともに、第2、3章ではオーストリア継承戦争（第1・2次シュレジエン戦争）と七年戦争を俯瞰し、第4章で「近代戦」の定義を試みる。そして第5章においてフリードリヒが「近代戦」をどのように先取りしていたのかについて具体的に考察する。（なお、本論文の内容は筆者個人的見解である。）

第1章 当時の欧州情勢

現在のベルギー、ドイツ、チェコ、オーストリア、クロアチア、ポーランド西部、イタリア北部は、当時、神聖ローマ帝国の領土だった。（図1「当時の欧州の主要諸国」参照）。そこは神聖ローマ皇帝の封建的家臣である約三百の諸侯が領邦国家を構成し、彼らは皇帝を

図1「当時の欧州の主要諸国」



¹ 「近代」の始まりを何時とするかは諸説あるが、本稿では「封建社会のあとの資本主義の社会。西洋史では市民革命（フランス革命）・産業革命からロシア革命までの時代（大辞泉）」とする。

² オーストリア継承戦争は、オーストリア、プロイセン間の戦争の他、バイエルン、オーストリア間の神聖ローマ皇帝位を巡る戦争、オーストリア、イギリス連合軍とフランス間のオーストリア領ネーデルランドを巡る戦争、イギリス、フランス間のカナダやインドの植民地を巡る戦争、オーストリア、スペイン間の北イタリアを巡る戦争等を含む。また七年戦争は、プロイセン、イギリスとオーストリア、フランス、ロシア、スペイン、スウェーデンが争った他、イギリス、フランス間の北アメリカやインドの植民地を巡る戦争を含み、その後の産業革命、市民革命にも影響を及ぼした。

³ 立川京一「日本におけるナポレオンの人気と理解」戦史研究年報第13号（防衛研究所、2010年）118頁。さらに言えば、各国の陸軍士官学校では現在でもフリードリヒの戦い方が教育されており、ドイツに至っては、小学校の歴史の教育でも教えている。（ヴェルテンベルク・ハレ大学『ドイツ民主共和国：2』（ほるぷ出版、1983年）123頁）

君主としながらも、軍事、外交などの自主的な権利を認められていた⁴。さらにザクセン公やベーメン国王といった有力な諸侯は選帝侯⁵として神聖ローマ皇帝を選ぶ選挙権を持っていた。

神聖ローマ皇帝は、1438年からオーストリア大公であるハプスブルク家が独占し、域内で群を抜いた領地と軍事力を有していたが、18世紀半ば、ある問題が起きる。それは、ハプスブルク家は男系長子が相続することになっていたが、当時の神聖ローマ皇帝カール6世には長女マリア・テレジアと次女マリア・アンナしかおらず、兄弟も死去しており、身近な親戚に男系男子がいなかったことである。そのため、カール6世はマリア・テレジアにハプスブルク家並びに領土を一括相続させようと事前に国事詔書を布告し、ドイツ諸侯やヨーロッパ列強に様々な譲歩を行って、その承認を得た。

しかし、1740年10月20日、カール6世が死去すると、国事詔書がありながらも、ハプスブルク家の相続を巡った争いが起こると予想された⁶。特に、カール6世の兄である先代の神聖ローマ皇帝ヨーゼフ1世の長女を妻とするザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世⁷、次女を妻とするバイエルン選帝侯カール・アルバート⁸、さらにスペイン国王フェリペ5世が相続権を要求し、そこにハプスブルク家の長年の敵であるブルボン家のフランスが介入することは必至と思われた⁹。

そのような中、その年の12月16日、突如プロイセン軍がオーデル川に沿ってシュレジエンに侵攻する。通説では、オーストリア継承戦争を「プロイセンがオーストリアからシュレジエンを奪い取った戦い」と表すことがあるが、プロイセンの側から見れば、それは違う。

両戦争の係争の地となるシュレジエンは、バルト海からオーストリアを結ぶオーデル河が流れ、その交易路として古くから栄えていた。流域は農業が盛んで人口も多く、ハプスブルク家領の富の三分の一を作り出していたとさえいわれた¹⁰。プロイセン（ブランデンブルク公国¹¹）はシュレジエンの北に隣接し、国王を輩出するホーエンツォレルン家は、16世紀、シュレジエンの三つの公爵領の相続権を得た。ところが三公爵領の宗主であるポヘミア国王（神聖ローマ皇帝¹²）が相続権を認めず、シュレジエンはハプスブルク家の領土となった。

⁴ 1648年、30年戦争の講和条約であるウェストファリア条約で、神聖ローマ帝国内の領邦国家はその領土内の主権が認められた。他方、神聖ローマ皇帝は法律の制定等について帝国議会の承認を得ることとなり、皇帝（ハプスブルク家）の権力は弱体化した。

⁵ 選帝侯はベーメン国王、ブランデンブルク公（プロイセン国王）、ザクセン公、バイエルン公、ハノーヴァー公とマインツ、ケルン、トリエールの三大司教

⁶ 実際、スペイン国王カルロス2世が後継者を残さずに死去するとスペイン継承戦争（1701年から1714年）が生じ、ポーランド国王アウグスト2世が死去した時も、王位を巡ってポーランド継承戦争（1733年から1735年）が生じた。

⁷ 1696年生、1763年没。1733年からザクセン選帝公。ポーランド継承戦争に勝利し、1734年からポーランド国王も兼任

⁸ 1697年生、1745年没。1726年からバイエルン選帝侯。1741年～1743年、ベーメン国王、1742年、15世紀以降唯一の非ハプスブルク系として神聖ローマ皇帝に即位

⁹ 林健太郎、堀米庸三編『世界の歴史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）211頁

¹⁰ シュレジエン地方は面積が約35,000?あり、当時約100万の人口を抱えていた。（林健太郎、堀米庸三編『世界の歴史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）217頁）

¹¹ ブランデンブルク公国（選帝侯領）は、現在のドイツのブランデンブルク州とベルリン州にあたり、ホーエンツォレルン家が選帝侯として治めていた。一方、プロイセンは、現在のポーランド北部、ロシアのカリーニングラード州、エストニアにあたり、もともと「ドイツ騎士団領（国家）」といわれていた。ブランデンブルク選帝侯アルブレヒト・アヒレス（ホーエンツォレルン家）の四男であるアルブレヒト・フォン・ブランデンブルク＝アンスバッハが、1510年にドイツ騎士団の総長になると、彼は「ドイツ騎士団国家」を自身のホーエンツォレルン家が世襲する「プロイセン公国」に代え、1525年、初代のプロイセン公となった。しかし、1618年、プロイセン公アルブレヒト・フリードリヒが男子を残さずに亡くなると、その女婿であるブランデンブルク選帝侯ヨハン・ジギスムント（ホーエンツォレルン家）が公位を継承し、以後、ブランデンブルク選帝侯がプロイセン公を兼ねる同君連合国家ブランデンブルク＝プロイセンとなった。そして1701年、ブランデンブルク選帝侯（プロイセン公）フリードリヒ3世が、スペイン継承戦争で神聖ローマ帝国側に味方すると、彼はその見返りとして神聖ローマ皇帝からプロイセン国王の称号を得た。

¹² 1526年、ベーメン国王のラヨシュ2世が後継者なく戦死すると、妻の兄で、かつ姉の夫であった神聖ローマ皇帝フェ

プロイセンは、16世紀以来、機会あるごとにシュレジエン三公領の返還を要求した。それらの要求は正当な相続権に基づいていただに、フリードリヒは譲らず¹³、カール6世の死後、ハプスブルク家の相続人候補より先にシュレジエンに侵攻¹⁴することとなった。

第2章 オーストリア継承戦争

1 第一次シュレジエン戦争

1740年12月16日、オーデル川に沿ってシュレジエンに侵攻したプロイセン軍は、ほとんど抵抗を受けることなく二、三週間で同地方を占領した。しかし、プロイセンの侵攻に激怒したマリア・テレジアは奪回を命じ、翌年2月、ナイペルク伯爵がオルミュッツからシュレジエンに進軍した。ナイペルク軍はナイセ、ブリークなどの孤立していた要塞を救援し、ブレスラウに進軍して、プロイセン軍を本国から遮断する作戦を採った。しかし、1741年4月10日、決戦を企図したフリードリヒにモルヴィッツで攻撃を受け、敗退¹⁵した。ヨーロッパの覇権をフランスと争い、オスマン・トルコにも連勝していたオーストリア軍の敗北に、欧州諸国は驚愕をもって知ったとされる。（図2「モルヴィッツの戦い」参照）

図2「モルヴィッツの戦い」



6月に入ると、フランスはプロイセンと十五年間の同盟条約を締結し、それ以前に同盟を結んでいたバイエルンとともに、オーストリアに侵攻した。スペインは北イタリアのオーストリア領に侵攻し、ザクセンはバーメンに侵攻した。国際的に孤立したオーストリアは、ロシアと提携して東からプロイセンを脅かし、イギリス¹⁶を仲介として、1741年10月、プロイセンと秘密の停戦協定（ラインシュネレンドルフの密約¹⁷）を結んだ。

図3「プラハ侵攻」

ちょうどその頃、バイエルン、ザクセンおよびフランス軍はバーメン王国の首都プラハに侵攻し、プラハを陥落させた（11月16日）。そして、フランスの支援を受けたバイエルン選帝侯カール・アルバートが皇帝選挙に勝利し、翌1742年2月12日、フランクフルト・アム・マインで神聖ローマ皇帝カール7世として即位した。（図3「プラハ侵攻」参照）



ルディナント1世（ハプスブルク家）が王権を継承し、じ後、バーメン王位はハプスブルク家の世襲となった。

- ¹³ 石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）77頁
- ¹⁴ 何故、ハプスブルク家の相続人候補より先に侵攻を開始したのかといえば、ザクセン選帝侯の存在が上げられる。当時、シュレジエンの西に隣接するザクセン公国の選定候フリードリヒ・アウグスト2世はポーランド国王も兼務しており、彼がシュレジエンを領有すると、ザクセン公国とポーランド王国は地続きになってブランデンブルク公国を包囲する領土になる。それを恐れたため、ザクセン選帝侯より先にシュレジエンを占領する必要があった。
- ¹⁵ プロイセン軍は2万の兵のうち、4千6百の兵と砲1門を失った。一方、オーストリア軍は2万の兵のうち、4千4百の兵と砲9門を失ったに過ぎなかったが、奇襲を受け、プロイセン軍歩兵を破ることができず、ナイセまで敗走した。
- ¹⁶ 1714年、ブランデンブルク公国の東に隣接するハノーヴァー公国の選帝侯ゲオルク・ルートヴィヒは、イギリスのスコット朝断絶に伴い、ジョージ1世（1660年生、1727年没）として英国王に即位した。そのため、ハノーヴァー選帝侯は英国王も兼ねていた。当時、イギリスはフランス、スペインと争っており、プロイセンとフランスの同盟は、東西からの脅威となった。一方、プロイセンにとっても、ハノーヴァー公国と（オーストリアを介した）ロシアとの同盟は東西からの脅威となった。そのためプロイセンは、イギリスの仲介を受け入れた。ジョージ1世はフリードリヒの母方の祖父（母ゾフィー・ドロテアの父）。後継者のジョージ2世（1683年生、1760年没）は母の実兄だった。
- ¹⁷ オーストリアは、確保していたナイセも含めたシュレジエン地方をプロイセンに割譲し、その中立を申し入れた。

一方、ラインシュネンドルフの密約によってプロイセンとの対立から解放されたオーストリアは、反撃に転じ、1741年12月にはリンツを包囲し、翌年1月にはバイエルンに攻め込んで、前述のカール7世の戴冠日には、バイエルンの首都ミュンヘンを陥落させた。

オーストリア軍の反撃が成功していく事態に直面し、フリードリヒはオーストリアの報復を恐れ、ザクセン、フランス軍と共同して、1741年12月から翌年2月にかけて、シュレジエンからメーレン、さらにウィーンへと進軍した¹⁸。しかし、途中でやり過ごしたブリュンを落すことができず、この進軍は失敗に終わった。

オーストリア軍は、マリア・テレジアの義弟ロートリンゲン公カール（以下、「カール公」という。）がプロイセン軍の攻撃に対処することとなり、カール公はメーレンに南侵したプロイセン軍をシュレジエンのプロイセン軍から遮断させるためイグラウからベーメンに北上するとともに、ハンガリー軍を南からシュレジエンに向けて

攻撃させた。そのため、フリードリヒは拠点としていたオルミッツを放棄し、オーストリアに会戦を求め¹⁹、クルディウムに兵を集結させた後、クッテンベルグに向かった。そして同地の西、コトウジッツで会戦となった（1742年5月17日）。オーストリア軍は善戦したものの、左翼歩兵部隊への側面攻撃を受け敗走した。一方、オーストリア軍の一部はブドヴァイス近郊のフラウエンベルグ城を攻撃していたが、5月24日、増援に駆け付けたフランス軍にザッハイで敗れた。（図4「コトウジッツの戦い」参照）

フランスとプロイセンを同時に敵にする困難さを理解したオーストリアは、イギリスの説得²⁰と相俟って、6月11日、シュレジエンの首都ブレスラウでプロイセンと和約を結んだ（ブレスラウ条約）。これにより約1年半続いた第一次シュレジエン戦争は終結し、シュレジエンはプロイセンの領土となった。

2 第二次シュレジエン戦争

プロイセンの戦線離脱によって、またしても戦況はオーストリアに有利となった。オーストリアは、先ずベーメンからフランス、バイエルン軍を駆逐すると、1743年春にはバイエルンを再度占領した。さらに翌1744年7月にはエルザス・ロートリンゲン地方（神聖ローマ帝国の西、フランス領）²¹に攻め込んだ。

図4「コトウジッツの戦い」



¹⁸ オーストリアの報復を恐れたという理由と共に、占領地を拡大するバイエルン、フランス連合軍に、戦後の講和条約で不利になることを恐れたという説もある。フリードリヒは、オーストリアが同盟諸国の離間を図るためにラインシュネンドルフの密約を暴露したことを理由にメーレン地方に侵攻し、オルミッツを占領した。

¹⁹ フリードリヒは、「（オーストリアとの）和平を促進しなけりばならなかったのだが、交渉にも決定的な勝利が必要となっていたからである。」と述べている。（石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）160頁）

²⁰ イギリスはフランスと争っており、オーストリアをフランスとの戦いに専念させるためには、プロイセンとの講和が不可欠と考えていた。そのため、それまでも行ってきた多額の資金援助やフランドルへの出兵を条件にプロイセンと講和するようオーストリアに迫った。

²¹ エルザス、ロートリンゲン地方は、当初、神聖ローマ帝国傘下のロートリンゲン公の領土だった（ロートリンゲン公国）。しかし、1736年、神聖ローマ皇帝カール6世は、ロートリンゲン公国を前ポーランド国王スタニスワフ・レシチンスキの領土とし（彼の死後はフランスの領土となった）、ロートリンゲン公フランツ・シュテファンには、代償として北イタリアのトスカーナ大公国を与えた。これは、マリア・テレジアへのハプスブルク家相続をフランス、ザクセン

このような状況は、フリードリヒに危機感を抱かせた。なぜなら、フリードリヒは、マリア・テレジアがプロイセンのシュレジエン領有を深く恨んでいることを知っており、国力が増せば、いずれプロイセンに報復すると容易に想像できたからである。そのためフリードリヒはブレスラウ条約を秘密裏に反故にし、1744年6月、再度フランスと同盟を結んだ（パリ条約）。またブランデンブルクの北やロシアの脅威に備えるため、スウェーデン皇太子に妹を嫁がせた。

さらに、フリードリヒは「自らを護る手段をまだ持っている時に、適時に（敵の攻撃を）防止しないのは愚行である²²。」として、1744年8月2日、プラハに進軍し、9月2日にはプラハを占領した。フリードリヒの戦略は、東からプロイセン軍が、西からフランス軍がエルザスから撤退するオーストリア軍を追撃して挟撃し、それを殲滅させ、オーストリアの降伏を迫るというものだった。

一方、オーストリア軍はフリードリヒの侵攻を知り、エルザスから撤退し、ベーメンに転進した。しかしフランス軍は出征していたルイ15世が急病になったため、フリードリヒの予想に反し、撤退するオーストリア軍に有効な追撃を行わなかった。

9月後半からオーストリア軍は主力が逐次ベーメンに入り、同時に軽騎兵（フザール）や軽歩兵（パンドゥール）を使ってプロイセン軍の補給部隊を襲撃²³させた。10月25日、フリードリヒは、偵察の結果、マルショヴィッツのオーストリア軍本隊が地形を利用して、非常に有利な布陣をしていることを知り、会戦を断念した。また補給難から兵士の欠員が甚だしいこともあって、12月4日、シュレジエンに撤退し、冬営²⁴した。

翌1745年1月20日、オーストリア軍をバイエルンから駆逐したばかりの神聖ローマ皇帝カール7世が病により死去した。オーストリアはバイエルンを戦争から脱落させるため攻勢に出て、4月にはミュンヘンを占領し、カール7世の後継者はハプスブルク家の相続権を放棄した。これにより神聖ローマ皇帝の援助というフランスやプロイセンの大義名分は失われた。そのためフリードリヒは、イギリスを介してオーストリアと講和しようとしたが、状況がオーストリアに有利になったため、仲介を拒否された。

一方、オーストリアは、シュレジエンの奪回に向け、南からハンガリー軍が、オーストリアに寝返ったザクセン軍²⁵とオーストリア軍がベーメンからブレスラウを目指そうとした。その情報を入手したフリードリヒは、主力同士の会戦を行って戦局を挽回しようとして、オーストリア軍をホーエンフリートベルクに誘致導入²⁶した。そして1745年6月3日夜、奇襲を行って大勝²⁷した。敗れたオーストリア軍はベーメンに撤退した。（図5「ホーエンフリートベルクの戦い」参照）。

図5「ホーエンフリートベルクの戦い」



に認めさせる譲歩だった。しかし、カール6世が死去すると、フランスもザクセンもオーストリアに攻め込んだため、エルザス、ロートリンゲン地方はオーストリアにとって因縁の地となった。

²² 石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）228頁

²³ これによる補給難は深刻で、疾病者、脱走兵が増加し、さらにフリードリヒや上官に対する信頼感の喪失、規律や団結を失った兵士の増加により、プロイセン軍が崩壊の危機に瀕する程だった。

²⁴ 軍隊などが陣営を張って冬を越すこと（大辞泉）。兵の損耗（疫病、飢餓、逃亡）を防ぐため、近代以前は「冬営」が当たり前だった。

²⁵ 1745年1月、ザクセンはオーストリア、イギリス、オランダとワルシャワ条約を結び、プロイセンを攻撃することになった。その見返りにイギリスとオランダから資金援助を受けることとなった。

²⁶ 1745年3月、フリードリヒはシュレジエン南部にカール辺境伯を配置して南からのハンガリー軍の攻撃に対して遅滞

フリードリヒは、この勝利を利用して再びイギリスを介して和平交渉を進めたが、マリア・テレジアに拒否された。9月13日、帝国議会はマリア・テレジアの夫、フランツ・シュテファンを神聖ローマ皇帝に選出した（フランツ1世）。

ホーエンフリートベルクの戦い後、カール公は、ベーメンのエルベ川上流域でフリードリヒと対峙し、戦線は膠着した。しかし、マリア・テレジアによるシュレジエン奪回の強い命令により、カール公は、軍の一部を北上させ、ベーメンとシュレジエン地方の連絡線を絶とうとした。補給に苦しむフリードリヒは、ベーメンで交戦せずシュレジエン地方へ撤退することにして、9月18日、エルベ川を東岸に渡り退却した。カール公は、フリードリヒを追い、9月29日夜、ゾーアでプロイセン軍に追いつき、その前進経路上に布陣した。翌30日早朝、フリードリヒは開戦準備を整えたオーストリア軍を発見し、戦列を形成して攻撃した。この時、プロイセン軍は数十分から一時間で戦列を形成したとされている。両軍は交戦し、最終的に、戦術²⁸上重要な高地を奪取したプロイセン軍が勝利した。

それでもプロイセンを屈服させることをあきらめないマリア・テレジアは、次に大規模な攻撃構想を計画した。「カール公の軍をラウジッツ地方からオーデル川（北東）方向に向かわせ、シュレジエンとプロイセン本国を遮断させた後、東からベルリンを攻撃する。ザクセン軍はマクデブルクに進出し、西からベルリンを攻撃する。ハンガリー軍をシュレジエン地方南部に侵入させ、プロイセンの注意を引きつけさせる。そして、ロシアが東プロイセンを攻撃する。」というものだった。（図7「マリア・テレジアの攻撃構想」参照）

図6「マリア・テレジアの攻撃構想」



この構想を探知したフリードリヒは、ロシア軍が来る前にオーストリア、ザクセン軍を叩くこととし、自らリーグニッツに駐屯する軍を指揮することにした²⁹。一方、カール公は、11月中旬、ザクセン軍と共同してベーメンからラウジッツに進軍し、ベルリンの東フランクフルト・アン・デア・オーデルを目指した。この時、カール公は情報が遮断され、プロイセン軍の位置を把握していなかった³⁰。ザクセン、オーストリア連合軍の展開位置を把握したフリードリヒは、11月23日、ホルシュタインから四縦隊に分かれて進発した。各縦隊は中將が指揮し、ナウムブルグが集合地点だった。各縦隊は

戦を行わせ、自身の本隊はナイセ、シュヴァイトニッツの間にあるフランケンシュタインに集結した。5月19日、カール公がベーメンからシュレジエンに向けて行軍を開始した。フリードリヒ2世は、カール辺境伯をシュレジエン南部から引き揚げさせ、対オーストリア戦に戦力を集中した。さらにランデスフートに配置したプロイセン軍の一部は、ズデーデン山地を超えたカール公の攻撃を受けると撤退させた。フリードリヒ2世の本隊もフランケンシュタインから北のシュヴァイトニッツに移動した。オーストリア軍のカール公は、これら一連のプロイセン軍の移動を、オーストリア軍の北からの侵攻に驚いたプロイセン軍が、本国との連絡を絶たれるのを恐れて撤退するためのものと信じた。そしてカール公は、6月3日、オーストリア軍をホーエンフリートベルクに、ザクセン軍をその北東ピルグラムスハイの村に宿営させた。

²⁷ 約6万のオーストリア軍は9千の死傷者と5千の捕虜を出し、ほぼ同数（約6万）のプロイセン軍は約5千の死傷者を出した。

²⁸ ここでは、18世紀後半に活躍したプロイセンの軍人、軍事学者であるビューローの定義、すなわち「戦略は敵の砲の射程外ないし視界外におけるすべての軍事行動、戦術はこの範囲内のすべての行動」という意味で用いる。（ピーター・バレット『現代戦略思想の系譜』（ダイヤモンド社、1989年）、103頁）

²⁹ 石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）367頁

³⁰ ナイセ川を防備させ、敵方から来る者は自由に入らせたが、敵方に行くことは禁じたからである。（同上、368頁）

騎兵と歩兵から成っていた³¹。前進中、ツィーテン將軍率いる先遣隊は、ヘンネルスドルフ村に宿営するザクセン軍を発見、攻撃して勝利し、さらに翌25日にはゲルリッツのカルル公の軍を撃破した。

一方、ロシアの介入前にザクセンを戦争から脱落させたいと望んでいたフリードリヒは、マグデブルクに駐屯させていたアンハルト＝デッサウ公をザクセンの首都ドレスデンに向かって南下させた。これによって、ザクセンからマンデンプルク、ベルリンを攻撃しようとしていた構想は破砕できると考えた。デッサウ公はザクセン軍の守備隊を逐次破って南進し、12月14日、ドレスデンの西ケッセルドルフに防御するザクセン、オーストリア連合軍を攻撃した。ザクセン、オーストリア連合軍は敗れ、ドレスデンに向かって敗走した³²。（図7「ヘンネルスドルフの戦い等」参照）

12月18日、フリードリヒがドレスデン市内に入城すると、士気を失ったザクセンは単独でもプロイセンと和平を結ぼうとした。イギリスの仲介もあり、オーストリアも、12月25日、プロイセンと和約を結んだ（ドレスデンの和約³³）。フランスは、プロイセンの単独講和を知り、オーストリア主力の攻撃がフランスに向くことを恐れ、フリードリヒに翻意を迫った。しかしフリードリヒは自己の安全を優先し³⁴、フランスの主張を退けた。これで第二次シュレジエン戦争は終わった。

図7「ヘンネルスドルフの戦い等」



図8「第12次シュレジエン戦争の総括」

※ 数字は参加者 ○内は死傷者と捕虜の数			
期日	戦い	プロイセン	オーストリア側
1741. 4. 10	モルヴィッツの戦い	○ 2万3千 (4千6百)	× 1万7千 (4千5百)
1741. 10. 9	〈クライシュネレンドルフの密約〉		
1742. 5. 17	コトゥジッツの戦い	○ 2万4千 (5千)	× 2万8千 (6千3百)
1742. 6. 11	〈ブレスラウ条約〉		
1745. 6. 4	ホーエンフリーデベルクの戦い	○ 5万9千 (4千8百)	× 5万9千 (1万4千)
1745. 9. 30	ゾーアの戦い	○ 2万3千 (4千3百)	× 3万9千 (7千5百)
1745. 11. 23	ヘンネルスドルフの戦い	【ツィーテン將軍】 ○ 8千5百 (120)	【ザクセン軍】 5千5百 (1,400)
1745. 12. 15	ケッセルスドルフの戦い	【デッサウ公】 ○ 3万 (5千1百)	【奥、ザクセン連合軍】 3万1千 (1万1千)

第3章 七年戦争

オーストリア継承戦争後、シュレジエンの奪回を企図するオーストリアは、軍備を増強³⁵するとともに、先の戦争とは逆に、プロイセンを欧州で孤立させるための外交工作を行った。ロシアとは、ドレスデンの和約後の1746年2月、秘密の攻守同盟³⁶を結んだ。またオーストリア継承戦争で、オーストリアに和平の圧力をかけたイギリスを同盟国として信頼できない³⁷と考え、カウニッツ首相をパリに派遣し

³¹ 同上、369 頁

³² 実はこの時、ゲルリッツ地域から撤退したカルル公の軍がドレスデン守備に向かっており、12月15日以降に会戦していれば、結果は違ったと思われる。敗走したザクセン軍は、最終的にドレスデンの防衛もあきらめ、カルル公の軍と合流してプラハまで退却した。

³³ オーストリアはプロイセンのシュレジエン領有を認めたブレスラウ条約を確認し、フリードリヒはオーストリアのフランツ1世を神聖ローマ皇帝として認めた。

³⁴ 石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）388 - 392 頁

³⁵ 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）29 頁

³⁶ プロイセンとオーストリアは第2次シュレジエン戦争の講和条約を結んだばかりであったが、オーストリアはロシアと「プロイセンがオーストリア、ポーランドもしくはロシアを攻撃した場合、ロシア、オーストリア両国はおのおの六万の軍を出して協力する。マリア・テレジアがシュレジエンを回復した場合、ロシアに対して200万グルデンを支払う」という同盟を結んだ。ロシアは当時、オスマン・トルコに対抗してバルカン半島に南下しようとしており、オーストリアと組むのを有利と考え、オーストリアとは比較的強固な同盟関係を築いた。

³⁷ オーストリア継承戦争時、イギリスは、インドや北米の植民地を巡ってフランスと争っていた。またオーストリア領ネーデルラントでは、フランス軍はイギリス、オーストリア連合軍に優勢だった。そのためイギリスは、オーストリア

フランスと同盟を結ぼうとした。このオーストリアとフランスの接近は、必然的にイギリスとプロイセンを近づかせた。フリードリヒは、「フランスとの同盟は、戦時にイギリス国王が領するハノーヴァー公国との戦争に繋がる。その結果、プロイセンは、オーストリア、ロシア、イギリスとの戦争になる。しかし、オーストリア継承戦争で明らかになったように、フランスはプロイセンの希望する共同攻撃を行わない可能性が高い。一方、イギリスとの同盟は、西のハノーヴァー公国からの攻撃を回避し、直接的な利害関係のないフランスがプロイセンを攻める可能性も低く、敵を減らすことができる」と考え、1756年1月、イギリスとウェストミンスター条約を結んだ。パリ条約を更新せず³⁸、イギリスと同盟を結んだことに憤ったフランスは、オーストリアとベルサイユ条約³⁹を結ぶ（1756年5月）。フランスとオーストリアは15世紀から反目しあい、16世紀後半にブルボン朝が誕生してからは三十年戦争、スペイン継承戦争などで戦火を交え、不倶戴天の敵同士と見做されていた。それだけに、この同盟は「外交革命」と呼ばれた。

以下、これから1763年2月まで続く七年戦争史について概観するが、非常に複雑なため、1年ごとの戦役⁴⁰で区切って説明する。

1 1756年の戦役

6月上旬、フリードリヒは、ロシアが国境に部隊を集結し、オーストリアもベーメンに兵力を集結したという情報に接した。そこで開戦は避けられないと考え、機先を制して先に攻撃することを決心した。フリードリヒは、東プロイセン、ポメラニア、シュレジエンに守備隊を残し、8月29日、自ら6万2千の兵を率いてザクセンに侵攻した。開戦当初のフリードリヒの戦略は次の通りである。

ザクセンを占領して、東からの脅威を無くすとともに、ザクセンの資金と兵士を戦争遂行に転用する。さらにザクセンからベーメンを圧迫し、ロシアの攻撃に先んじて、メーレンからウィーンへ攻撃し戦争を終わらせるというものである。

フリードリヒは軍を三兵团に分ち、集合点をザクセンの首都ドレスデン南西のピルナと定めて侵攻し⁴¹、同地のザクセン軍を包囲した。ザクセン軍は、ベーメンから北上するオーストリア軍と連携しようとしていたが、その情報を入手したフリードリヒは、ピルナの南方ロボジッツに急行し、10月1日、北上したオーストリア軍を撃破した。（図9「ロボジッツの戦い」参照）10月16日、ザクセンは降伏し、その軍はプロイセン軍に編入された。オーストリアの首相カウニッツはプロ

図9「ロボジッツの戦い」



軍を対フランス戦線に集中させるため、プロイセンとの早期講和を望んだ。さらにプロイセンの西に隣接するハノーヴァー公国はイギリス国王の領土でもあり、プロイセンとの対立は戦線を拡大させる可能性があったことも講和を望んだ要因である。こういった姿勢は、オーストリアを犠牲にするものと映った。

³⁸ 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）105頁

³⁹ この条約でフランスは、オーストリアのシュレジエン回復に同意し、オーストリアが攻撃を受けた場合、2万4千の援軍を送ることを約束した。

⁴⁰ この場合の「戦役」とは、「戦争状態にある軍の一連の行動」という意味で使用する。戦争の全体を局面（年）ごとに分割し、整理するための単位として、この用語を用いる。

⁴¹ プロイセン軍は、マグデブルクから1コ縦隊、ベルリン、ヴィッテンベルグから1コ縦隊、ラウジッツから1コ縦隊を進軍させ、ピルナ地方を包囲した。（石原莞爾『石原莞爾全集第六巻、我が時代の歴史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）80-81頁）

イセンの先制攻撃を非難し、それを自国に有利に展開した。

2 1757年の戦役

翌1757年1月、帝国議会はプロイセン膺徴⁴²の連合軍編成を決議し、オーストリアの同盟国、すなわちフランス、ロシア、スウェーデンなども戦争に介入する準備を始めた。

4月20日、プロイセン軍はベーメンのプラハに向かい、東西二方向⁴³から侵攻した。ベーメンに進出していたオーストリア軍は、分散させていた部隊をまとめるのに精一杯であったためプラハに退却し、1万5千をプラハ城にとどめ、6万をプラハ城の東に布陣して、プロイセンとの会戦に臨んだ。5月6日、フリードリヒ（6万4千）は布陣したオーストリア軍を攻撃した。そこはプロイセン軍にとって不利な地形で、正面攻撃を余儀なくされて苦戦したが勝利した。プロイセン軍は敗走したカール公以下4万の将兵をプラハ城に包囲した。その後、メーレンにいたオーストリアのダウン將軍（5万）がプラハを救援しようと接近した。6月18日、フリードリヒ（3万2千）は、プラハの東方コリンに布陣したダウン軍を側面から攻撃しようとした。ところがオーストリア軍が方向を転換したため正面攻撃となり、劣勢なプロイセン軍は大きな損害を出して敗退した。その結果、プロイセン軍はプラハの包囲を解き、ザクセン（バウツェン）に後退した。（図10「プラハ、コリンの戦い」参照）



その頃、東方ではロシア軍（7万5千）が東プロイセンに侵攻し、8月30日、東プロイセンのレーワルト軍を撃破した。北方ではスウェーデン軍（1万）がボンメルンに侵攻した。西方では、フランス軍10万のうち7万がハノーヴァーに侵攻し、7月下旬、イギリス軍が敗れてデンマーク国境方面へ退却していた。残りの3万はザクセンへ進出した。

そのため、フリードリヒは、敵の侵攻に晒されている州から義勇軍⁴⁴を編成し、スウェーデン軍に対抗させた。ベーメンのオーストリア軍に対しては、バーフェルン將軍の指揮する4万5千の軍をラウジッツ地域まで後退させ、シュレージエンを防衛しようとした⁴⁵。一方、ロシア軍は、プロイセン軍を破ったものの、補給が続かず撤退してしまった。

そしてフリードリヒは、西方のフランス軍および帝国諸侯連合軍に鋒先を向け、8月末、ザクセン東部のバウツェンを出発し、ドレスデンを経てライプツィヒに向かった。11月5日、ライプツィヒ西方のロスバッハで、フリードリヒはフランス、帝国諸侯連合軍（5万5千）を捉え、会戦に及んだ。プロイセン軍は左翼を衝こうと迂回した連合軍を三方向から攻撃して大勝した。そしてフリードリヒ

⁴² うちこらすこと、征伐して懲らしめること（大辞泉）

⁴³ 林健太郎、堀米庸三編の「世界の戦史 第六巻」には「アンハルト＝デッサウ率いる1万9千とフリードリヒの3万9千はザクセンから、シュヴェーリンの3万5千とバーフェルンの2万はシュレージエンからプラハに進軍した。」とされているが、フリードリヒの著した「七年戦争史」には「プロイセン部隊は四兵団に分かれていた。（中略）作戦計画に従えば四軍は同時にベーメンに侵入し、相異なる道路によって、集合点と定められたプラハで相会することとなった。（中略）今や、軍（全体）はロボジッツ（プラハ近郊）に陣した。」と異なる内容で記載されている。しかし、いずれにしろ複数の兵団が異なる機動を行って合一し、作戦を行ったことは間違いない。

⁴⁴ （正規の軍隊ではなく）戦争、事変の際に、人民が自発的に編制する戦闘部隊（大辞泉）

⁴⁵ ところが、バーフェルン軍は、11月12日、シュヴァイトニッツの要塞（シュレージエンにおける補給基地）をオーストリア軍に奪われ、11月22日にはプレスラウ近郊でオーストリア軍に敗れて、バーフェルン自身も捕虜となってしまった。そして11月25日にはシュレージエンの首都プレスラウが陥落した。

は間髪入れず、救援を求めていたシュレジエンに向かった。11月13日にはライプツィヒを陥ち、オーストリア軍に占領されたブレスラウに向かい、28日にはカツバッハに達した。そこで、シュレジエン方面の敗残部隊を吸収したフリードリヒ（3万5千）は、12月5日、ブレスラウ南方のロイテンでカール公率いるオーストリア軍（6万5千）と遭遇し、会戦に及んだ。戦闘はフリードリヒの側面攻撃が成功し大勝した。こうしてプロイセン軍は19日にはブレスラウを回復し、オーストリア軍はベーメンに退却して冬営した。（図11「ロスバッハ、ロイテンの戦い」参照）

図 11 「ロスバッハ、ロイテンの戦い」



3 1758年の戦役

ロスバッハ、ロイテンの大敗にも関わらずオーストリアと同盟国は、プロイセンの包囲を緩めなかった。ロシア軍は再度、東プロイセンに侵攻し、1758年1月、ケーニヒスベルクを占領して、東プロイセンをロシアに編入⁴⁶した。ザクセンには、ロスバッハの会戦後、オーストリア軍によって補強された帝国諸侯連合軍が進出していた。また、ポンメルン地方はスウェーデン軍侵入の危険にさらされ、シュレジンゲン方面にはオーストリア軍主力が集結していた。

フリードリヒは、ザクセン方面に弟のハインリヒ（2万）を派遣するとともに、ポンメルン方面にはドーナ将軍（2万）を派遣した。特にドーナ将軍にはスウェーデン軍を撃退し、さらにロシア軍が進出した場合はそれに対処させようとした。フリードリヒ（5万5千）は、4月18日、シュレジンゲンのシュヴァイトニッツ要塞を奪回し、ついでメーレンのオルミッツへ進み、6月1日、そこを包囲した。そこで、ダウン将軍率いるオーストリア軍主力と決戦を行い、ロシア軍に対する後顧の憂いを絶とうとしたのである。しかし、ダウン軍は会戦を避けて包囲の態勢をとったため、プロイセン軍はオルミッツの包囲を解き、ケーニヒスグレーツからランデスフートへ後退した。ここでフリードリヒは、ロシア軍がキュストリン（オーデル河右岸）まで進出し、ドーナ軍と対峙しているとの報告を受けた。フリードリヒは自らロシア軍に対処するため、ランデスフート⁴⁷を出発した（8月11日）。

フリードリヒ軍は、8月22日、キュストリン西のゴルガスト（オーデル河左岸）においてドーナ軍と合流し、ロシア軍を攻撃（拘束）しつつ、主力はキュストリン北方のアルト＝ギュステビーゼでオーデル川を渡り、ロシア軍を包囲しようとした。ロシア軍は包囲の態勢に気づき、ツォルンドルフに進出し、25日早朝、両軍は会戦となった。ロシア軍は全部隊の方向を旋回させたため、右翼は大損害を受けた。しかしプロイセン軍も疲労と弾薬の欠乏により、完全にロシア軍を撃破できなかった。戦闘は26日夕まで続き、ロシア軍は敗走した。この戦いで、ロシア軍は全兵力のほとんど三分の二、プロイセン軍も約三分の一を失った。ロシア軍は、その後、ポンメルン東部のヴァイクセル河まで退き冬営に入った。

⁴⁶ 以降、東プロイセンは、プロイセンとロシア間で講和条約（サンクトペテルブルク条約、1762年）が結ばれるまでロシアに占領された。

⁴⁷ 現在のポーランド南西部カミエンナ・ゴラのこと

ロシアの次の脅威は、マイセンからドレスデン一帯に侵攻した帝国諸侯連合軍とダウン軍が、ハインリヒ軍を包囲することだった。これを防ぐため、9月1日、フリードリヒはグローゼンハインに進んだ。ロシア軍が敗れたのを知ったダウン軍はドレスデンからラウジッツ地方に前進し、そこでシュレジエンとフリードリヒのプロイセン軍主力、プロイセン本国間の連絡を遮断しようとした。フリードリヒ軍（3万）もダウン軍を追ってラウジッツ地方に入った。そこでダウン軍（7万8千）は、ホッキホルヒ村に陣を築き、後を追ってその近くに陣を敷いたフリードリヒ軍と対峙した。10月14日早朝、オーストリア軍はプロイセン軍に奇襲をかけた。圧倒的なオーストリア軍の攻撃を背後と側面に衝かれ、プロイセン軍は惨敗を喫した。この戦闘で、プロイセン軍は約三分の一の兵力を失い、シュレジエン地方へ撤退した。オーストリア軍も損害が大きかったため、年末にはベーメンへ後退し冬営に入った。（図12「ツォンドルフ、ホッキホルヒの戦い」参照）

図 12 「ツォンドルフ、ホッキホルヒの戦い」



4 1759年の戦役

冬営の後、フリードリヒは当初、ランダスフートに駐屯し、ベーメンのオーストリア軍がシュレジエン地方に侵攻してきた場合に備えた。ところが、オーストリアのダウン軍（8万）はロシア軍と連携してプロイセン軍を撃滅しようとラウジッツ地方に北上し、マルクリッサ⁴⁸に布陣した（7月6日）。そのため、フリードリヒ軍（4万4千）も、その南方に移動し、七月末、両軍は対峙状態に入った。フリードリヒとしては、オーストリア軍とロシア軍が連携する前にオーストリア軍を叩きたかったが、オーストリア軍は陣を敷いたまま動かなかったため、その陣地を攻撃することができなかった。

一方、6月末、ロシア軍（7万）はポーゼンに集結し、西に前進を開始した。フリードリヒは、ポンメルンに配備していたドーナ軍（2万8千）にロシア軍の背後から攻撃させようとしたが、ドーナ軍はロシア軍の兵力の多さから攻撃しなかった。そのため、ヴェデル将軍がドーナ将軍と交替した。しかし、ヴェデル軍はカイでロシア軍と戦ったが敗退した（7月23日）。そしてロシア軍のサルトゥイコフ将軍は、そのままフランクフルト・アン・デア・オーデルを占領するため西に向かった。このためフリードリヒは自軍の指揮を弟ハインリヒに委ね、ミュルローゼで、敗残のヴェデル軍と合流した（8月6日）。

オーストリアのダウン軍は、カイの戦いのロシア勝利にもかかわらず、ラウド将軍の指揮する2万の軍を派遣しただけで、ロシア軍と提携せず、マルクリッサ付近にとどまった。8月5日にロシア軍ラウド軍は合流し、フランクフルト・アン・デア・オーデルのオーデル川を挟んだ右岸のクネルスドルフ付近の高地に布陣した。

これに対しフリードリヒ軍（4万）は、オーデル河左岸から前進し、8月11日、キュストリンの南でオーデル河を渡り、クネルスドルフのロシア、オーストリア連合軍に攻撃した（8月12日昼）。プ

⁴⁸ 現在のポーランド西部レシナのこと

ロイセン軍はロシア軍左翼に攻撃し、それは撃破されたが、その後ろの高地からオーストリア、ロシア軍が強力な増援を行い、同日夕にはプロイセン軍は完全に敗退した。

ベルリンまで約60キロの地点で全軍の約半数と重砲兵部隊全部を失ったフリードリヒは、絶望のあまり自決を考えた程だった。ロシア、オーストリア連合軍がベルリンを攻撃した場合、防ぐ兵力はあまりにも少なかったからである。それでもフリードリヒは敗残部隊をオーデル河左岸に集め、ロシア、オーストリア連合軍の攻撃に備えた。ところが、ダウン將軍（オーストリア）とソルティコフ將軍（ロシア）はグーベンで会見し、両軍はベルリンへ進軍せず、シュレジエンの占領を優先するという協定を結んだ（8月22日）。そのため、連合軍のベルリン攻撃はなくなり、ロシア軍はシュレジエンへ転進した。危うく一命を取り留めたフリードリヒは、これを「ブランデンブルク家の奇蹟」と弟への手紙に書いた。

一方、シュレジエンに残されたハインリヒ軍は、ダウン軍の補給地点を攻撃してベーメンへ退却させようとした。しかし、ダウン軍は逆にドレスデンを陥落させ（9月4日）、ザクセン地域の占領を強化した。ロシア軍は協定通りシュレジエンに南下したが、軍を再編成したフリードリヒにグロガウで追撃を受け、さらにオーストリア軍が協定に違反しザクセン攻略に集中したこともあって、10月下旬撤退した。その後、フリードリヒはドレスデンのオーストリア軍に向かったが、これを駆逐することはできずフライベルクで冬営に入った⁴⁹。

（図13「クネルスドルフの戦い」参照）

またフリードリヒはこの苦境から脱するため、1759年6月頃から、イギリスを通じて講和会議の開催を呼びかけた。フランス、ロシアと交渉し、両国をオーストリアから離間させることを図ったのである。11月にはイギリスとプロイセンによって和約締結に関する通告が行われた。しかし、1760年4月、オーストリアとフランスはそれを拒絶する旨、回答した⁵⁰。

5 1760年の戦役

1760年に入ると、フリードリヒは、ハインリヒ公（3万5千）をロシア軍に、ヴェルテンベルク公（6千5百）をスウェーデン軍に備えさせ、フケー將軍（1万5千）をランデスフートの諸隘路を監視させるために派遣した。自身（6万）はマイセンで、ドレスデンを占領しているダウン元帥（7万2千）と対峙した。

6月23日、シュレジエン南部から北上したオーストリアのラウドン將軍（4万）が、ランデスフト付近でフケー軍を壊滅させた。この敗戦の知らせをうけたフリードリヒは、1万2千の軍を帝国諸侯軍に備えマイセンに残し、さらに1万2千をドレスデンに残して、自身は3万6千を率いてシュレジエンに向かい、リーグニッツに布陣した（8月10日）。一方、ダウン元帥もドレスデンからフリードリヒと並行して進軍し、その行動を牽制した。ラウドン軍も北上し、ダウン軍と合一してオースト

図 13 「クネルスドルフの戦い」



⁴⁹ 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）299 - 325頁

⁵⁰ 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）331 - 333頁

一方、ロシア軍は、再びベルリンに向かい進軍した。補給の問題から行動は遅く、スウェーデン軍に対処していたヴェルテンベルク公が急行した。しかし、その偵察部隊は10月9日にベルリンに侵入した。また、そのころ北上していたラシー軍もロシア軍と共にベルリンに侵入した。さらに帝国諸侯軍はトルガウやヴィッテンベルクの線まで進出していた。そのためブリードリヒはシュレジェンからベルリン救援に急行した。その報を知ったロシア軍やラシー軍等は退路を遮断されることを恐れ、ベルリンから撤退し、それぞれワルテ河、ライプツィヒへと撤退した。そのためフリードリヒ軍はグーベンからザクセンへ方向を転じた。

11月3日、フリードリヒは自ら歩兵30コ大隊、騎兵50コ中隊をもってダウン軍の正面に当たり、ツィーテン将軍に歩兵30コ大隊、騎兵70コ中隊をもってダウン軍の背後に向かわせ挟撃した。この戦闘は激戦となり、最終的に戦術上重要な高地を奪取したプロイセン軍が勝利した。そしてオーストリア軍はドレスデンやベームンまで退き冬営した。フリードリヒ軍はライプツィヒで冬営した。⁵³ (図14「リーグニッツ、トルガウの戦い」参照)

プロイセン王国
(ブランデンブルク公国)

(ヴェルデンベルク軍)

(ワルテ河方向)

ベルリン

クロッセン

(露軍)

グーベン

ザークラフ
(ハインリッヒ軍)

ヴィッテンベルグ

(奥: テュー軍)

トルガウ

ライプツィヒ

(帝国諸侯連合軍)

マイセン

(普軍)

リグニッツ

ドレスデン

ザクセン

ランデスフート
(フーク軍)

(シュレージエン)

(奥: ラウドン軍)

ケッセン公国)

2月、プロイセンのフェルディナンド公はカッセルに進出して、同地をフランス軍から奪回した。フランス軍は、同地奪回のため攻撃に転じ、フェルディナンド公はハノーヴァーに退却した。フランス軍はそれ以上の行動は行わず、戦線は膠着した。

51 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）367頁
52 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）343 - 372頁
53 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）386 - 403頁
54 細部場所不明。フリードリヒの『七年戦争史（433頁）』にはオッペルスドルクに布陣し、ラウドン軍を牽制すると

を牽制するとともに、オペルン近郊のロシア軍をツィーテンらに襲撃させ、その合一を防いだ。8月上旬、ラウドン軍はワイデナウに退却した。

しかし、ロシア軍とオーストリア軍は、その北西方向で再度合一しようとし、その情報を掴めなかったフリードリヒはシュヴァイトニッツ北西で両軍の合一を許してしまった（8月下旬）。余りにも強大な連合軍（15万）の前に、フリードリヒはブンツェルウィツ⁵⁵で防御陣地を築いた。連合軍はプロイセン軍への攻撃を9月1日に予定していたが、調整が折り合わず、さらに10日にはオーストリア軍の補給する糧食が不足したことでロシア軍がポーランド方面に撤退してしまった。その結果、ラウドン軍は攻撃目標をプロイセン軍の糧食倉庫であるシュヴァイトニッツ城に変更し、10月1日、そこを奪取した。軍需品を鹵獲されたフリードリヒは軍をブレスラウへ移動させ、冬営した。

さらにポメラニアでは、9月にロシア軍（3万）がコルベルクを包囲し、海上からのスウェーデン軍と共同して、12月中旬に同地を陥落させた。⁵⁶ このように、プロイセンは四方で劣勢となり窮地に陥っていた。（（図15「1761年の戦役」参照）

図 15 「1761年の戦役」



7 1762年の戦役

1762年1月、ロシアで女帝エリザベタが死去し、甥のピョートル三世⁵⁷が即位した。彼はフリードリヒに心服していたため、それまでのエリザベタのプロイセン対処方針を何ら継承せず、全て変更し、オーストリア軍と共同していたロシア軍を召還するとともに、プロイセンと講和条約⁵⁸および同盟を結ぶことになった。さらにスウェーデンとの和平交渉の仲介も約した。

東プロイセンやポメラニアに力を割く必要のなくなったフリードリヒは、弟のハインリヒ（6万）をザクセンに配置し、自身（5万5千）はシュレジエン確保に乗り出した。同盟を結んだロシア軍（2万）が来援すると、駐屯していたブレスラウからシュヴァイトニッツを奪回するため進発した（7月1日）。

一方、オーストリア軍は、ダウン元帥率いる主力（4万9千）がシュヴァイトニッツ南方のブルケルスドルフに布陣し、両軍はそこで会戦することになった。7月18日、来援したロシア軍のチェルニシェフ将軍が、フリードリヒに「本国（ロシア）でピョートル三世が皇后により廃位⁵⁹され、新た

にも、支隊を派遣してラウドン軍を攻撃したとある。

⁵⁵ 細部場所不明。フリードリヒの『七年戦争史（441-442頁）』には「国王軍は攻撃的行動を取り得なかったため、ブンツェルウィツ付近に陣を進めた。陣営の正面、両側、背面に堡壘を築かしめ、一種の要塞となった。」とある。

⁵⁶ 石原莞爾『石原莞爾全集第五巻、七年戦争史（フリードリヒ大王著）』（石原莞爾全集刊行会、昭和52年）427 - 475頁

⁵⁷ 1728年～1762年。ロシア皇帝在位は1762年1月～7月。ユトランド半島南部に位置するシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン公カール・フリードリヒと初代ロシア皇帝ピョートル1世（大帝）の長女アンナ・ペトロヴナの息子。母は生まれてすぐ、父は11歳の時に亡くなり、13歳の時に母の妹で未婚のエリザベタ女帝（第6代ロシア皇帝）の養子（皇太子）となった。妻はプロイセンの将軍クリスティアン・アウグストの娘エカテリーナ

⁵⁸ プロイセンとロシアの講和条約は、1762年5月5日、サンクトペテルブルク条約として結ばれた。これにより、北プロイセン等のロシアの占領地域はプロイセンに返還され、さらに対オーストリアの援軍も約束された。

⁵⁹ フリードリヒによれば、ロシア皇帝夫婦はエカテリーナ皇后とポニャトフスキー伯爵との情事を原因として冷え切っており、クーデターはギリシャ教会の権益の搾取を咎められた皇后が、自己の身を守るため、近衛兵（君主を警護する君主直属の軍隊）を味方に引き入れて行ったとしている。7月9日、皇后は自らを君主と宣言し、10日、ペテルスブル

ロシア軍の威圧の効果を利用するため、フリードリヒはチェルニシェーフに、引き揚げを三日間延期することを要請し、了承された。そして7月20日夜半、行動を開始し、ブルケルスドルフのダウン軍を攻撃した。戦闘は21日の終日続き、夕方、オーストリア軍は退却し、ダウン元帥はグラッツへ向かった。その後、シュヴァイトニッツのオーストリア軍も開城した（10月9日）。フリードリヒはラウジッツ地方にも部隊を派遣し、シュレジェンを再び占領した。

図 16 「ブルケルスドルフの戦い」



ロシアとスウェーデンはすでにプロイセンと講和を結び、ドイツ諸侯も中立を約束し、そのうえイギリス、フランス両国の和睦も成立した。オーストリアも、深刻な財政難や軍の士気の低下から、独力でプロイセンを屈服させることは不可能と認識していた。さらにトルコが大軍をオーストリア国境に集結させている⁶²という情報も入った。そのため、11月下旬、ザクセンを仲介してオーストリアとプロイセンとの間で講和交渉が始まった。そして

図 17 「七年戦争の総括」

図 17 「七年戦争の総括」

期日	戦い	プロイセン	オーストリア側
1756. 10. 1	ロボジッツの戦い	○ 2万8千 (2千9百)	× 3万3千 (約2千9百)
1757. 5. 6	ブラハの戦い	○ 6万4千 (1万4千)	× 6万 (1万7千)
1757. 6. 18	コリンの戦い	× 3万2千 (1万3千)	○ 5万 (8千)
1757. 11. 5	ロスバツハの戦い	◎ 2万2千 (6百)	【仏、ザクセン、奥連合軍】 × 5万5千 (1万)
1757. 12. 5	ロイテンの戦い	◎ 3万5千 (6千)	× 6万5千 (3万)
1758. 8. 25	ツォルンドルフの戦い	○ 3万6千 (1万3千)	【露軍単独】 × 4万4千 (1万9千)
1758. 10. 14	ホッキホルヒの戦い	× 3万 (9千)	○ 8万 (8千)
1759. 8. 12	クネルスドルフの戦い	× 4万9千 (1万9千)	【露、奥連合軍】 ◎ 7万2千 (1万7千)
1760. 8. 15	リーゲニッツの戦い	○ 1万6千 (3千5百)	× 3万2千 (1万)
1760. 11. 3	トルガウの戦い	○ 4万9千 (2万)	× 5万3千 (1万6千)
1762. 7. 21	ブルケルスドルフの戦い	○ 5万5千 (1万6千)	× 7万5千 (4千)

60 エカテリーナ2世は、プロイセンとの講和条約は承認したものの、同盟条約を批准しないことにしたので、援軍は引き揚げることになった。

61 パリ条約に先行して成立した条約。パリ条約とは、1763年2月10日、七年戦争とインド、北米の植民地戦争の講和条約としてイギリス、フランス、スペイン間で結ばれた条約。これによりイギリスの海外での覇権が確立された。

62 当時、オーストリアとトルコの協約の期限が満了していた。

⁶³ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）321頁

国軍、特にロシア軍との連携不足やロシア女帝の死といった偶然を無視できないものの、各個撃破を選んだフリードリヒの戦略眼や彼の不屈の精神が勝利の一因であることは間違いない。この戦争でプロイセン国民は「フリードリヒ精神」という勤勉で不屈の精神性が植え付けられ、後にプロイセンがドイツを統一する基礎になった。

第4章 「近代戦」の特性

一般的に「近代戦」の嚆矢⁶⁴はフランス革命戦争⁶⁵と言われ、それはナポレオン戦争⁶⁶に引き継がれたとされる。コリン・グレイ⁶⁷らによれば、フランス革命後、「近代戦争の特徴である徴兵制による市民軍（国民軍）の創設、大規模な戦時経済体制やイデオロギー⁶⁸戦争の導入、教条化⁶⁹」といった新しいアプローチによる戦争の遂行が実現した⁷⁰とされる。

また、「軍事思想史入門」等を著した浅野祐吾氏によれば、（フランス革命後の）ナポレオンによる戦争は、「敵と交戦して、圧倒殲滅することを目的とした戦術的決戦。従来には見られない大規模な兵力の増大。兵数規模の増大による戦場規模の拡大と長駆遠征作戦」という点で「過去に例を見ない画期的なもの」と指摘されている。以下、「近代戦」以前の戦いが、フランス革命を経て、どう変化し、何が「近代戦」の特性なのかを明らかにしたい。

1 イデオロギーに起因する敵の殲滅

フランス革命が勃発すると、オーストリアをはじめとする君主が支配する西欧諸国は、王政を打倒した革命の影響が自国に及ぶことを恐れ、フランス（革命）政府を否定しなければならなかった。一方、革命政府はオーストリアやプロイセンといった列強の干渉を排除する必要に迫られ、また戦争を利用して政府内の権力闘争に勝とうとして対外戦争を引き起こした。その結果、対外戦争は列強の軍事介入から革命政府（その理念）を守ること、引いては攻め込んだ列強の政治体制（君主制）を否定するというイデオロギーの戦いとなった。この戦いは、双方が自らの政治体制を懸けた戦争であったため、相手のそれを打破しない限り、目的が達成されることはなかった。そのため戦争は、相手を「殲滅⁷¹することを目的とする⁷²」ものとなった。

2 大規模な兵力の形成に起因する変化

フランス革命によって、従来の支配階級だったフランス貴族の多くは他国に亡命した。その結果、

⁶⁴ （こうし）物事のはじまり、最初（大辞泉）。戦いを始める合図として放つ、音の響く矢を由来とする。

⁶⁵ 1792年から1799年の間に、革命政府に率いられたフランスと他のヨーロッパ各国との間で生じた戦争の総称。1792年4月、革命政府が、戦争によって反革命派を駆逐しようとオーストリアに宣戦布告して始まった。その後、殆ど全てのヨーロッパ各国がフランスと交戦状態に入った。

⁶⁶ 1799年（ブリュメール18日のクーデタ）から1815年の間に、ナポレオンがヨーロッパ各国で行った戦争の総称

⁶⁷ 1940年生、2020年没。英レディング大学教授。I I S S（国際戦略研究所）等でも勤務。世界三大戦略家の一人

⁶⁸ 「イデオロギー」とは、もともとはギリシャ語の「イデー（物事に対して持つ考え）」の学、すなわち「観念学」だったが、「政治、社会に関する基本的な考え、思想傾向」の意味も持った。あるイデオロギーを信奉した人は、そのイデオロギーにとらわれ、純粋でかたくなな行動を取ることがある。（「ブリタニカ国際大百科事典」から筆者が抜粋）

⁶⁹ 「教条」とは、「教会によって権威づけられ、永久の真理として簡潔にまとめられた教義（ある宗教が真理と認める教えの内容）」のこと。「教条化」とは「状況や現実を無視して、教条やある特定の原理・原則に固執する応用のきかない考え方や態度になってしまうこと。特にマルクス主義において、歴史的情勢を無視して、原則論を機械的に適用しようとする公式主義」をいう。（「小学館 日本大百科全書」、「大辞泉」から筆者が抜粋）

⁷⁰ ジョン・ベイリス、ジェームズ・ウィルツ、コリン・グレイ『戦略論 現代世界の軍事と戦争』（勁草書房、2012年）65頁

⁷¹ すっかり滅ぼすこと、皆殺しにすること（大辞泉）

⁷² 公安委員会（後述）の委員だったラザル・カルノは、「戦争は暴力的状態である。無制限にそれをせよ、さもなければ家に帰れ。」「（戦争では）我々はとことんまで皆殺しをしなければならない。」と述べている。（マイケル・ハワード『ヨーロッパ史における戦争』（中央公論新社、2010年）116頁）

貴族によって構成されていた将校団は一挙に減少した。また革命による封建制の廃止⁷³に伴って兵士を招集できず、革命当初は、その不足分を義勇兵⁷⁴で補った。1793年1月、ルイ16世が処刑されると、欧州諸国のほぼ全てがフランスの敵となり⁷⁵、革命政府はその脅威に追い詰められ、18歳から40歳の男子を徴兵した。その結果、その年の7月には兵士の数が65万人に達した。8月に国民総動員令が発令されると、当時の若者は愛国心から進んでこの徴兵に応じ、さらに44万人が集まった。その後、「臨時的な総動員法」ではなく「恒常的な徴兵制度」として、1798年、「ジュールダン法」という徴兵制度が制定された。これは国王ではなく国民に主権⁷⁶があるため、当然（国民は国家を守る）兵役の義務もあるという考え方で、20歳から25歳までの男子が強制的に徴用され、大規模な軍隊が構成された。こうして「徴兵制による国民軍、大規模な兵力」が形成された。

大規模な兵力の形成は、「補給の形態」を変化させた。フランス革命以前は、糧食の補給がなければ軍の主力である傭兵が逃亡や凄惨な略奪をしてしまう。他方、現地で糧食を調達すれば、その地の農民は逃亡や反抗をして、作戦の遂行が妨げられる。そのため、フランス革命以前の戦争では、現地徴発ではなく、補給拠点として倉庫を設営する方式が採用されていた。作戦に際しては、予め準備していた倉庫か、軍隊の移動にあわせ順次設営した倉庫を戦闘行動の基準にした。このため、戦闘範囲は倉庫を中心に三、四日の行程に限定された⁷⁷。しかし、フランス革命で生まれた「国民軍」はあまりにも兵士の規模が大きく、移動間、糧食を供給して補給することが困難を極めた。そのため、補給の形態は、以前のやり方、すなわち現地徴発へと回帰した⁷⁸。自国内で戦争し、現地徴発を自国で行うと、その土地（自国）の経済は打撃を受ける。そのため、戦争は国外で行い、国外で現地徴発するようになった。その結果、戦争は自ずと攻撃的になった⁷⁹。また、倉庫に機動⁸⁰を制限されないため、機動速度が向上するとともに、長距離機動や奇襲戦が可能となった。

さらに大規模な兵力の形成は、「機動の形態」も変化させた。大規模な軍隊は、一本の道路で移動するには規模が巨大すぎ、分散して移動する方が効率的だった。しかし、分散すると部隊は脆弱になる。それをカバーしたのが師団制、軍団制である。もともと軍隊は、君主のもと歩兵、騎兵、砲兵といった諸職種の部隊をほぼ一つにまとめて運用していた。しかし、フランス革命で成立した公安委員会⁸¹（事実上の革命政府）で軍事問題を担当したカルノーは、従来からあった思想を実行に移し、諸

⁷³ フランス革命直前に発足した憲法制定国民議会は、1789年8月4日、封建制の廃止を宣言した。これによって、封建的な兵役、つまり領主（貴族）等が徴集していた兵士の供給が絶たれた。

⁷⁴ 政府の徴兵によらず、自発的に軍に参加する兵。また、戦時に義勇軍に属して戦う兵（大辞泉）

⁷⁵ 1793年1月、ルイ16世が処刑されると、イギリス首相ピットは、対フランスの軍事同盟を欧州諸国間で結び、フランスを包囲して、革命の広まりを防止しようとした。1793年3月、第1次対仏大同盟は結成され、オーストリア、プロシヤ、ロシア、スペイン、オランダ等が参加した。

⁷⁶ もともとは「君主の権力」という意味だったが、「国家の権力」という近代的な意味に転用された。①国民および領土を統治する国家の権力、統治権。②国家が他国からの干渉を受けずに独自の意思決定を行う権利、国家主権。③国家の政治を最終的に決定する権利（大辞泉）

⁷⁷ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）191頁

⁷⁸ ジョン・ベイリス、ジェームズ・ウィルツ、コリン・グレイ『戦略論 現代世界の軍事と戦争』（勁草書房、2012年）66頁

⁷⁹ その結果、「革命戦争は略奪の、ナポレオン戦争は征服（という名の略奪）の戦争となった。若い徴集兵が、何故エジプトやポーランド、ロシアまでナポレオン軍に参加したかといえば、一部は略奪品を得る見込みにあり、一部は戦場における昇進の希望にあり、一部は冒険を求めることにあった。」（マイケル・ハワード『改訂版 ヨーロッパ史における戦争』2010年、中央公論新社、118頁）さらに言えば、糧食等を略奪された土地の人々は、敵国軍に恨みを抱き、ゲリラとなった。例えばスペインでは、フランス軍は、略奪を受けた農民からゲリラ戦争の挑戦も受けるようになった。（ジョン・ベイリス、ジェームズ・ウィルツ、コリン・グレイ『戦略論 現代世界の軍事と戦争』（勁草書房、2012年）67頁）

⁸⁰ 軍隊などが部隊等の迅速な展開行動を起こすこと。軍事において「移動する」という意味（大辞泉等）

⁸¹ 1792年8月10日、武装した市民等がパリのテュイルリー宮殿を襲撃してルイ16世の王権を停止した。その結果、選

職種を組み合わせた「師団⁸²」を革命軍の編制とした。これにより、移動中に敵と遭遇しても自衛する能力を持つことになった。その後、ナポレオンは2から3コ師団から成る「軍団」を編制し、単独で迅速に機動し、独立戦闘能力を有する軍隊⁸³とした。これら軍団は、会戦の中でも独立的に行動し、一方面の作戦を担当することがあった。

3 傭兵の排除に起因する変化

フランス革命以前、各国の軍隊は、封建的な兵役を基盤とした兵士と傭兵から成り立っていた。君主（諸侯）は諸侯（家臣）の領地を保護する代わりに、諸侯（家臣）は君主（諸侯）に軍事力（兵士）を提供するという封建的な軍隊と、君主自身が自らを防衛するために、直属の兵士だけでなく、有給の傭兵⁸⁴を雇った軍隊から構成されていた。兵役の義務が傭兵を雇うための現金支払いに代えることが許されると⁸⁵、諸侯（家臣）は商業的利得を好み、傭兵が軍隊の大半を占めた。しかしフランス革命によって徴兵制が採用され、容易に兵士の補充が可能になると傭兵は排除されていき、軍隊は傭兵によって制限されていた以下の行動から解放された。

第一は「態勢戦⁸⁶の衰退」である。傭兵の時代、指揮官は、兵士の損耗や逃亡を恐れ、敵も味方もできるだけ戦闘そのものを回避し、いかに戦わずして相手に勝つかを考えた。そのため、相手が撤退せざるを得ないように、自軍を有利な態勢に配置する「態勢戦」が主流だった。現在では、戦争は「敵の戦闘力を徹底的に破壊する武力衝突」と考えるのが一般的だが、当時の西欧では、敵軍隊と敵国の後方連絡線を絶つ位置に布陣して補給等を遮断することが戦略、戦術と考えていた。18世紀の軍事研究家であるジョミニも、「これ（態勢戦）が中世からフランス革命時代までの実際の戦争の姿であった。」と記している⁸⁷。

しかし、フランス革命で生まれた「国民軍」にとって、有利な態勢を取るだけでは敵の政治体制を打破することができず、傭兵の排除と相俟って、敵により深刻なダメージを与える軍隊を目標とする攻撃になった。さらにナポレオン戦争になると、敵の軍隊を撃滅⁸⁸すれば相手の資産を占領、統制し、フランス（ナポレオン）の政治的要求をほぼ貫徹することが可能になるとして⁸⁹、一層、相手を殲滅する戦いが追求された。その結果、決戦⁹⁰を求めることが主流になった。

第二は「宿営の容易化」である。傭兵は国家に対して結びつきがないため、あらゆる機会を狙って逃亡しようとする。そのため、傭兵の時代、野営⁹¹する場合は完全な幕舎を必要とし、監察将校など

挙を経て「国民公会」が成立（9月20日）し、立法府と行政府を担う機関になった。しかし、国民公会の議員は約800名で、意思決定に時間がかかったことから、1793年、少数で意思決定を行う「公安委員会」が成立した。公安委員会は、1795年11月2日、総裁政府の誕生によって廃止されるまで、事実上の政府として機能した。

⁸² 「師団（Division）」という言葉は、もともとフランス語の「分割（Dividere）」に由来する。

⁸³ ジョン・ペイリス、ジェームズ・ウィルツ、コリン・グレイ『戦略論 現代世界の軍事と戦争』（勁草書房、2012年）66頁

⁸⁴ マイケル・ハワード『ヨーロッパ史における戦争』（中央公論新社、2010年）25頁

⁸⁵ 同上、30頁

⁸⁶ 18世紀のフランス、ロシアで活躍した軍人、軍事研究家のジョミニは、「戦争概論」で、この戦争指導のやり方を「position war」と呼び、日本では「陣地戦」と訳されることがある。しかし、「陣地戦」という言葉は「陣地防御（ある一定の地域に陣地や要塞を築き、敵の攻撃を挫（くじ）くこと）」と誤解される恐れがあるため「（直接的な武力戦闘を行わず）自軍の態勢で、相手の企図を破碎する（封じ込める）戦争」という意味で「態勢戦」とした。

⁸⁷ ジョミニ『戦争概論』（中央公論新社、2001年）93頁

⁸⁸ うちほろぼすこと、攻撃して全滅させること。旧陸軍では、戦闘で敵の戦力を半分に以下に減少させた場合の称（大辞泉）

⁸⁹ ジョン・ペイリス、コリン・グレイ等『戦略論 現代世界の軍事と戦争』2012年、勁草書房、68頁

⁹⁰ 「決戦」とは「最終的な勝敗を決めるために戦うこと。または、その戦い」（辞泉）

⁹¹ （軍隊が）野外にテントを張って宿泊すること。また、その陣営（兵士が駐屯する仮屋）（辞泉）

そして最後は「追撃⁹⁶の一般化」である。戦闘で勝利した後、敵部隊を追撃することは重要だったが、傭兵の時代は、兵の逃亡を恐れ、混乱した部隊の掌握を重視していた。しかし、逃亡の恐れが減少したため追撃が一般的となった⁹⁷。

まず「大規模な兵力」という観点では、図8
および図17の「両戦争の総括」に見られるよ
うに、近代戦以前は、せいぜい8万の兵員によ
る戦いだったが、ナポレオンのロシア遠征

「機動」はナポレオン戦争の本質的かつ根本的要素⁹⁸と言われ、各会戦では「独立した」軍団を、敵にどこで攻撃しようとしているか悟らせず、複数の道路を使って機動させ、完全なタイミングで集結し⁹⁹、相手に「決戦」を強要した。例えばウルムの会戦（1805年）では、21万の「グランドアルメ（大陸軍）」をオーストリア軍の背後に軍団ごと分散して機動し、集結させて勝利した。同様にイエナの会戦（1806年）でも7コ軍団が三方向から分進し、そのうちの3コ軍団がイエナで、1コ軍団がアウエルシュタットで独立的に戦い、プロイセン軍を撃破した。ナポレオン自身も機動を重視し、「行軍は

```

graph LR
    A[フランス革命] --> B[国民軍の誕生  
(徴兵制の採用)]
    B --> C[イデオロギーの戦い]
    B --> D[大規模な兵力の形成]
    B --> E[傭兵の排除]
    C --> F[殲滅戦]
    D --> G[補給形態の変化  
(倉庫補給の衰退)]
    D --> H[機動形態の変化  
(師団・軍団制)]
    D --> E
    E --> I[「態勢戦」の衰退]
    E --> J[宿営の容易化]
    E --> K[夜間行軍などの  
機動の多様化]
    G --> L[攻撃的な戦争]
    G --> M[奇襲能力の向上]
    G --> N[長距離機動能力  
の向上]
    G --> O[機動速度の向上]
    H --> O
    H --> P[独立戦闘能力  
の向上]
    I --> Q[決戦の追求]
    J --> R[補給の負担軽減]
    J --> S[機動能力(速度、  
距離)の向上]
    K --> O
    K --> T[追撃の一般化]
  
```

19

戦争なり、戦争の成否は移動の適否にある。勝利は機動する軍隊の頭上に輝く」と言ったとされる¹⁰⁰。

また、ナポレオンは「ひとたび他国に侵入することを決したなら、戦闘を行うことを恐れてはならない。敵を探し求め、これに戦いを挑むべきである」と説き、さらに「戦争に勝利しても、休息せず、あらゆる後方連絡線を遮断（追撃）すべき¹⁰¹」として、「敵の殲滅」を追求した。この例としてはリヴォルト（1797年）、アウステルリッツ（1805年）、イエナ、エックミュール（1809年）の会戦¹⁰²があげられる。

第5章 フリードリヒの戦い方に見る近代戦の萌芽

前章で「近代戦の特性」を整理したが、それを踏まえて、第2及び第3章で述べたフリードリヒの戦いの中に、どのように「近代戦」の萌芽が現れていたのかを考察する。

このフリードリヒの戦いと「近代戦」の関係の考察は、「近代戦」の特性である大規模な兵力、機動に関する能力の高さ、独立戦闘能力および決戦の追求（殲滅戦）という観点から論じる。

1 大規模な兵力に関する考察

図8および図17で示したとおり、プロイセンの兵力は多くない。しかしプロイセンは、他国と違って「カントン（連隊区）制」という徴兵制を採用していた。

フリードリヒの先代国王フリードリヒ・ウィルヘルム1世¹⁰³は、傭兵の雇用による財政の圧迫から、全国を連隊区に分け、各区から1コ連隊¹⁰⁴の要員の一部を徴集し、傭兵と合わせて連隊を編成した。連隊区では、その土地を有していた貴族（ユンカー）が徴兵官となって新兵を徴集したが、徴集されたのは世襲隷農¹⁰⁵の子弟と商工業職人だけだった。そのため、フランス革命後の市民軍が有していたナショナリズムというよりは、領主と農民の関係が色濃く反映した軍隊となり、封建的な軍隊だった。また徴兵が一部に偏り、必要な兵数を得られなかったため、傭兵も用いられていた。傭兵の割合は三分の一から二分の一を占め、フリードリヒをして「わが国のすべての連隊は、半数は内国人、半数は外国人傭兵からなっている。もともと傭兵は国家に対して何の結びつきも持っていないから、あらゆる機会をねらって脱走しようとしている。したがって、これを防止することは何よりも重要である¹⁰⁶」と言わしめた。

このように、大規模な兵力、ましてやナショナリズムを有した市民軍をフリードリヒは作っていない。しかし、他国に先駆けて徴兵制を採用した結果、プロイセンは突出して軍人の割合が高かった。（図19「主要諸国の兵力」¹⁰⁷参照）これはまぎれもなくカントン制が原因で、フリー

図 19 「主要諸国の兵力」

※ 1740年の主要諸国の兵力				
国	人口	歳入／年 (100万ターレ)	軍隊（定員）	軍人の割合 (100人あたり)
フランス	2,000万人	60	203,800人	1.02
オーストリア	1,300万人	20	108,000人	0.83
イギリス	900万人	24	30,000人	0.33
ザクセン	170万人	6	26,000人	1.53
バイエルン	70万人	5	10,000人	1.43
プロイセン	250万人	7	99,500人	3.98

¹⁰⁰ J.F.C.フラー『フラー制限戦争指導論』（原書房、2009年）、63頁

¹⁰¹ 同上、62頁

¹⁰² 同上、62頁

¹⁰³ 1701年生、1740年没。「兵隊王」と呼ばれ、プロイセン軍の増強を図った。

¹⁰⁴ 軍隊の部隊編制単位の一。一般に、旅団の下、大隊の上に位置する。（大辞泉）

¹⁰⁵ 封建時代に、農奴（土地を持たず、領主に隷属して耕作等を課せられた農民）的束縛から解放され、賦役（ぶえき、農民が領主から課せられた労働）を徴集されず、生産物または貨幣で地代を払っていた農民（大辞泉）

¹⁰⁶ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）268頁

¹⁰⁷ ヴェルテンベルク・ハレ大学『ドイツ民主共和国：2』（ほるぷ出版、1983年）114頁

ドリヒ・ウィルヘルム1世が即位した時点の3万8千の兵員¹⁰⁸が、没時には約10万にまで増加した。「近代軍」が徴兵制をもとに大規模な兵力を造成したことを考えれば、プロイセンの徴兵制は、不十分な点があったにしても近代戦の特性の端緒を示していたといえる。

2 機動に関する能力の高さの考察

フリードリヒの戦いで、機動に関する能力の高さは「1757年の戦役」でのロスバッハの戦いからロイテンの戦いで証明できる。フリードリヒは、前者の戦いでフランス、帝国諸侯連合軍を破る（11月5日）と、270キロ以上を15日で行軍し、後者の戦いでオーストリア軍に大勝した。この行進速度は当時、驚異的で、ナポレオンはこの機動を激賞している¹⁰⁹。

また、「1758年の戦役」でのランデスフートからのロシア軍対処、それに続くツォルンドルフからホッキホルヒへのオーストリア軍対処や、「1759年の戦役」でのマルクリッサからのロシア軍対処、さらには「1760年の戦役」でのリーグニッツからグーベン、トルガウへのオーストリア軍対処のための機動は、距離および迅速性において、敵の追隨を許さなかった。

さらに「独立戦闘能力」とも関係するが、「第2次シュレジエン戦争」でのヘンネルスドルフの戦いでは、軍を4コに分けて機動し、「1756年の戦役」では軍を三兵団に分ち、集合点をドレスデン南西のピルナと定めて三方向から侵攻して同地を包囲した。「1757年の戦役」では諸職種から編成されて独立的に行動できる部隊を、プラハに向かって、東西二方向から侵攻させた。

以上から、プロイセン軍は、同時代の他国とは異質な機動を行い、極めて高い機動に関する能力を有していたといえる。そういった観点から、プロイセンは「近代戦」における機動の重要性を先取りしていた。

3 独立戦闘能力に関する考察

独立戦闘能力に関しては、「1760年の戦役」でのリーグニッツの戦いがあげられる。この戦いで、フリードリヒは軍を独立して戦える2コ部隊に分け、左翼の部隊でプロイセン軍を包囲しようとしていたオーストリア軍（ラウドン軍）を急襲し、右翼の部隊でオーストリア軍本隊（ダウン軍）を牽制した。ラウドン軍が撃破されると、ダウン軍は撤退した。また、「1659年の戦役」でのクネルスドルフの戦いでは、プロイセン軍は敗北したものの、独立軍団の戦闘方式を採っていた。フリードリヒは軍を2コ部隊に分け、北と東の方向からロシア軍を攻撃した。北からの攻撃によって、ロシア軍左翼は撃破できたものの、その後のロシア軍の予備隊の投入によってフリードリヒは敗北した。

さらに、「第2次シュレジエン戦争」でのケッセルドルフの戦いでは、デッサウ軍が独立して行動し、ザクセン、オーストリア連合軍を撃破した。同様に、七年戦争では、当初からロシア、スウェーデン、オーストリア等に対応するため、概ね2万人規模の独立した部隊を東プロイセン、ポンメルン、ザクセン等に配置した。それらは敗戦も多かったが、「1759年の戦役」でのヴェデル軍のように、ロシア軍を背後から攻撃した戦いや、「1762年の戦役」でのフライベルクの戦いにおけるハインリヒ軍のようにオーストリア、帝国諸侯連合軍を破った戦いもあった。

以上から、プロイセンは「近代戦」と同様、独立した戦闘能力を有する部隊で戦争を遂行したと考える。

¹⁰⁸ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）201頁

¹⁰⁹ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）285頁

4 決戦の追求（殲滅戦）に関する考察

例をあげるまでもなく、フリードリヒは、両戦争を通じて、敵との決戦を追求し続けた。これに対し、フリードリヒの弟ハインリヒは「防衛作戦¹¹⁰」を主張し、しばしば論争になっていた¹¹¹。フリードリヒも防衛作戦は考慮していたと推測できるが、次のように考え、「攻撃作戦」を追求した。

「防衛作戦の方が有利ではないかという批判をよく耳にするが、自分はきわめて多数の敵をかかえているので、どうしても攻撃に出ないわけにはいかない。すなわち、左にロシア軍、右にオーストリア軍、そして背後にはスウェーデン軍と、ちょうど三角形のなかに閉じこめられている状態で、これでは防衛作戦などまったく不可能である。¹¹²」

つまり、圧倒的な敵を前に、戦略的に守勢に立たされたプロイセンは、防衛のための攻撃、すなわち敵に先んじて各個撃破を行う以外に途はなかったと考えていた。そして、敵の企図（プロイセンの敗北）を挫くためには、敵部隊の殲滅を追求するしかなく、そのための決戦を求めた。

このことは第4章第3項で述べた「態勢戦」を多用したオーストリア軍と比較すれば顕著である。

「第1次シュレジエン戦争」でのモルヴィッツの戦いやコトウジッツの戦い、「第2次シュレジエン戦争」でのカール公の戦い方（ベーメンからの北上）は、プロイセン軍と本国等との遮断を狙う「態勢戦」だった。そういった観点から、フリードリヒの決戦の追求は「近代戦」を先取りしていたといえる。

終わりに

以上、フリードリヒの戦い方が生み出された原因や現出した事象の背景は、フランス革命以降の「近代戦」とは異なる¹¹³ものの、筆者が論じてきたように、「大規模な兵力」という特性を除けば、それは「近代戦」の先取りをしたことに相違はないと考えられる。

そして、拙稿では、どちらかというとな戦略的な事象を比較し、戦術的な事象は対象から外した。なぜなら、フリードリヒとナポレオンの時代で、戦場での隊形や小銃、銃剣といった陣形や兵器にそれ程の差異がないと考えたからである。しかし、今後の課題として施条マスケット銃¹¹⁴や散兵戦¹¹⁵に関しても詳細な分析を試みたい。

拙稿は、先行研究で指摘されたことの具体的な検証にすぎないかもしれない。しかし、オーストリア継承戦争と七年戦争に関して、フリードリヒの著した戦記（「我が時代の歴史」、「七年戦争史」）に忠実に経緯を略図に展開¹¹⁶した。また近代戦の特性について再整理した。その点では若干の意義があるのではないかと考える。

最後に、本論文の作成にあたって、東京理科大学の平塚三好教授のご指導をいただいた。心から感謝申し上げます。

¹¹⁰ この場合は、城塞等において防御することと考えられる。

¹¹¹ 林健太郎、堀米庸三『世界の戦史 第六巻』（人物往来社、昭和41年）307頁

¹¹² 同上、300頁

¹¹³ フリードリヒの戦いが圧倒的な敵を前に編み出されたという点では、フランス革命後の戦いと同様ではある。

¹¹⁴ マスケット銃は16世紀後半に開発されて一般化し、17世紀半ばには銃剣も取り付けられるようになった。そのため、それまでの陣形（長槍兵を縦深に配備）を廃れさせた。施条（ライフルング）されたマスケット銃は、マスケット銃より射程や命中精度に優れていた。一般化された時期には諸説がある。

¹¹⁵ 敵による損害を避けるため、兵士が適当な距離をとって戦う戦闘様式。オーストリア継承戦争時には、既に「軽歩兵部隊」として同様の戦いを行っていた。

¹¹⁶ 各戦争の経緯を地図等に展開した先行研究は見当たらなかった。また、当時と現在では地名が変化し、特にシュレジエンは現在ポーランド領になっているため、ドイツ語表記の地名と異なる。